

関西現代俳句協会 会報

No. 36

2007. 10. 20

二〇〇七年度「総会」特別講演

『関西の俳人たち』

講演・宇多 喜代子

(現代俳句協会々長)



(拍手)

みなさま、こんにちは。いま、豊田さんがご紹介下さいましたように、あっちへ行ったりこっちへ

行ったりしております。そんな折、十分なお話はできないと思いますが、よろしくお願いたします。

今年には現代俳句協会が設立されて六十年という節目

品年表です。いままで、この一冊というまとまった年表がありませんでしたから、これを作っておきますと後年の人たちの勉強の手助けになるのではないかとという趣旨で企画されたものです。

たとえば、戦後「天狼」が創刊されたのはいつだったかというような俳句にかかわる出来事の歴史、これと平行いたしましたして、山口誓子のこの句はいつ作られたのか、というような表現の歴史をまとめておくという年表です。委員長の寺井谷子さんを中心に、幾人かの実働要員で作品の採録を進めております。いずれ、関西の方々の作品を採集するときには、皆様にもお手伝いいただかねばなりません。亡くなられた方だとか、あまり表には出て来られなかったけどこの人の句は残したいとか、一句だけけど多くに刺激を与えたというような方もあるわけですから、それを一冊にまとめたいのです。

そんなことに関連しまして、ここに「関西の俳人たち」という題を掲げたのですが、「たち」と申しますのは、わ

たしもあなたもということだと思ってください。

もともと私はよく歩くほうですが、只今の役職柄、自分勝手にうろろろするという歩き方とはちがう歩き方、いままでとはちがうお出合いの仕方をしなくてはならないことがあります。いわゆる地方にまいりましたり、地方の方とお逢いしたときによく耳にするのが「中央と地方」という言い方です。そこには、どこかに中央が上位で、地方が下位だというニュアンスがあります。その意味では関西も地方なんです。

私自身は、大勢でいようと少数でいようと、都にいようと鄙にいようと、自分の立つ場が中央だと思っておりますから、いままでそんなことに気をとめたことがなかったのですが、ときに、免れがたく中央に対する地方という感覚でお話が進むことがあるんですね。

先ほど吉本伊智朗さんがご挨拶でおっしゃっていましたが、ように、当協会もやみくもに人数ばかりにこだわりますと、たしかに質が危うくなる。かといって一人では何もできない。営利団体ではないわけですから、要はいい作品を作つて残せばいいのですが、現実の日々はそう容易くはないですね。いまという時期、協会だけでなく、俳句結社のエネルギーの維持とか俳誌の運営など、困難山積です。現代俳句協会の最大のいいところは、一人でも参加できるということですから無所属の方も大勢いらつしやる。

所屬結社とかグループの大小に関係なく、一人一人が俳人としての資格で参加できていること、それに俳句の表現が自由だということでしょう。

さて、今朝、雨の車窓の風景を眺めながら、遠い記憶が蘇るような、ほつとするような気分になりました。私は雨が大好きです。遠い記憶の中に、いつも雨が降っているんです。記憶には、今朝なにを食べたとか、十年前にあんなことがあつたという記憶とは別に、生き物としての記憶とこのがあるようです。千年も万年も前の遠い記憶の中に、なぜか雨が降っているんです。雨が降りますと、遠い日の雨が、人の心身を休ませる恵みであつたという感覚が蘇ります。

そんな遠い記憶にくらべますと、ついこの間のようにも思われますのが、いま私がこだわっております「昭和」という、私たちが必死で生きてきた時代です。

昭和とは一九二六年十二月二十五日から、一九八九年一月七日までの六十余年ですね。それを西暦で言い表しても、私にはピンときません。たとえば敗戦の昭和二十年と一九四五年は違いますでしょう。

いま、書店に、昭和に関する書物がたくさん出ております。「昭和の道具」とか「昭和の顔」「昭和の暮らし方」というようなアルバムや、それに回想録とか研究書などが、たくさん出ています。いろいろ読み漁っているのですが、

手っ取り早いところでは保坂正康さんの著書。どちらかといえばアカデミックに書かれています。たとえば『昭和史入門』というような本です。この方、ノンフィクション作家です。もはや昭和も「入門」を必要として語られるようになったのですから、愕然とします。

この『昭和史入門』で、昭和史から学ぶべきものとして四点あげられています。一つが「機械文明の進歩による価値観」。これはわかりますね。なにしろ、六十年前には、その梅田の駅前を馬車が通っていたんですから。車も電話も珍しい時代でしたもの。二つ目が「思想が日本社会の軸になりえないこと」、三つ目が「世界戦争を抑止する政治技術とは何か」を学んだということ、そして「市民的権利の確立とさらなる拡大」です。いずれについてもなるほどと思います。まだ未成熟だよというところもあるかもしれませんが、昭和戦前にくらべれば、たしかに「市民的権利」は確立されました。もつとも顕著なことは「思想が日本社会の軸になりえないこと」でしょうか。かつての日本は固有の思想を軸にして廻っていましたものね。

ここで言えることは、この四点のいずれもが俳句と無縁ではないということです。機械文明が俳句をどう変えてゆくのか、分散した思想が、俳句の軸となりうるか、いまだ不明で見当もつきませんが、おそらくみんな揃ってペンで句帳に俳句を書きつけるのは、私たち世代が最後になるの

ではないかと思われれます。平成生まれの俳人たち、いまや高校生以下の若者たちの俳句との付き合い方は変わってきています。

保坂氏が結論として述べているのは「昭和という時代は、人類史が体験したすべての社会現象や事象がみごとに詰まっている。こうした時代は、日本では始めてのこと」であるということですね。また、こうも書かれています。これから百年、二百年先を想定しても必ずや「昭和に生きた日本人は何を考えていたのか」というテーマで検証されるにちがいないと。まったく同感です。

私は、父母だけでなく、祖父母とも同居して暮らしてきました。祖父は明治八年の生まれでしたから、祖父が生まれたとき、まだ子規はこの世の人だったんです。その祖父母の会話には、よくゴイッシンが出ておりました。ご一新、明治維新のことです。直接にこれを体験したわけではなかったのですが、たぶん周囲の人たちの話題にあがっていたのでしよう。祖父が出て行った戦争は日露戦争でした。それが父母になりますと十五年戦争で、戦前と戦後がはっきりと分かれていました。そして私です。さらに私以後となりますと、もはや時計の針が動かなくなってしまうのです。

これを俳句の時間と限定して、現在という時点から、俳句の過去、俳句の未来、と時間の矢を放ちましたとき、そ

の矢は、どうしても過去の方角しか飛んで行かないのです。

俳句のシンポジウムなどでは、「俳句の未来」「明日の俳句」などということしか話題になりませんし、そこにしか価値はないものと思われがちですが、過去に向かう時間、これも大事だと思うのですね。「昨日の俳句」にだつておおいに語る価値はあるということです。

保坂正康の昭和俯瞰図にありましたように、二十年先三十年前先には、二十年前三十年前の人々はどうか生きてかとか、何を食べていたか、何を着ていたかというようなことが話題になるでしょう。それと同じように、二十年前三十年前の俳句はどうであつたか、ということは、テーマとして語るに足るもののように思います。いまが語られるようになったとき、あなたもわたしも一つに括られます。私たちは、大きく括れば「芭蕉以来三百年の俳人たち」かも知れませんが、小見出し的には「昭和の俳人たち」です。

いま、未来の俳句を目指す方々にとつての関心は、たとえば世界を舞台にした俳句です。おおきな地球という規模でみると、たしかに日本は地球の一地方です。その地方が、さらに北海道とか九州とか関西とかいう地方に細分化されます。そこから大きな世界を展開するのが俳句の力なんです。すぐれた先人たちの句は、それを生み出す技量に裏打ちされていたように思われます。

私は、生粋の上方人ではありませんが、上方が大好きで

す。たぶん死んでいくのもここだと思いますが、よく他地域の方から関西のどこがいいのとか、どういう魅力があるの、などと尋ねられます。そんなとき、関西ことに大阪のよいところは、よいものはよい、という価値基準だと申します。これは武士による考え方ではなくて、町人の育てた考え方であり、自由な文化基盤なんです。階級制度や主義主張でものを決めてゆかない。

そういう考えでできているかたまりが、かたまりというのは変ですが、まあかたまりですね。それが「大阪俳人クラブ」のような集まりでしょう。その線上でもっと突っ込んだ勉強をしてみようや、ということ。「大阪俳句史研究会」という会をつくりました。つくりましたと申しますのは、坪内稔典さんの呼びかけに賛同するところから始めましたので。昭和六十年でしたか。

当初「大阪俳句史研究会」は、なんで「大阪」やねんという声が多かつたのですね。これは地図の上の大阪という意味ではないんですよ。大阪を含んだ近畿圏、関西一円にゆかりの、ということですよ。大阪が大阪だけで成り立っていないように、兵庫にも淡路島があれば、但馬もある。京都も丹後から、綴喜郡までがあります。奈良、和歌山は入り組んでいますし、三重だつて入ってきますね。そんな一円をひっくるめて「大阪」としたので。

当時はまだ関西の先輩俳人がご健在で、たいへんな力添

えをして下さいました。山口誓子、阿波野青畝、永田耕衣、右城墓石、橋間石、下村非文、五十嵐播水、そういう先生たちがどなたも二つ返事で顧問役を引き受けて下さってスタートしました。

ただ、これにかかわったからといって、特別にいいことがあるわけではないですよ。関西にゆかりの俳人についての研究であったり、新資料の発掘であったりです。被対象俳人にもっとも近い位置にあったお身内とか、門下の方とかの話を知ったり、資料に触れたり、現地に向いたりして一人の俳人を知ってゆく、という集まりです。

豊田都峰さんは、鈴鹿野風呂と長谷川素逝についてお話になりましたね。和田悟朗さんは赤尾兜子と橋間石でしたね。出回っている研究書などにはない側面史のような、ちよつとしたエピソードなどを知りますと、作品に関しても、今までとはちがった鑑賞ができるようになり、なかなか有意義なんですよ。私、個人的には、後藤比奈夫さんに後藤夜半のことをお話し願ったことで、当時の「蘆火」という俳誌を手にすることができまして、思いもかけず昭和十年前後の京大俳句の動きや、日野草城の「旗艦」誕生の周辺事情が理解できたというようなことなど、あの集まりがなかったら、巡り会わなかったことでした。それと、日野草城の門下であり、その周辺の庇護者であった水谷碎壺の子息のお話がききましたことも、お陰様でしたね。

たとえば、最初の理事代表が後藤比奈夫さん、次が和田悟朗さん、その次が森田峠さん、千原草之さん、次が桂信子、現在は茨木和生さん、というふうにナニナニ協会とは関係なく研鑽してゆこうということです。これを他地域の方にお話ししますと、そんなことできるのか、と不審がられます。草間時彦さんが、どうにかして東京でもやってみたいとおっしゃったのですが、やはり無理だと残念がっておられました。

その会の機関誌の編集を引き受けておりましたので、被対象俳人のうちの五十数名を取りあげまして、『大阪の俳人たち』というシリーズ六巻を出すお手伝いをしましたが、これはまことに有意義でした。語り部役をして下さった多くの方が、すでに物故されました。二度とその肉声に触れることができなくなりました。すると、かつて先人のことを話された方々が、次の世代のだれかによって語られてゆく。そうして「俳人たち」という基盤が膨らんでゆくんですよ。

その会の機関誌のあとがきに、私、「明治以降の、大阪の俳人たちの作品年表を作りたい」などと大口をたたいているんです。締切りもなければ、誰からも催促されないといいこともあって、その後二十年以上が過ぎまして、いまだに何もできておりません。こういうことをする最後の年代が、私たちだろうという気が逸るばかりです。

また、過去いきいきとしていたモノが、力を發揮するということとを再認識いたしましたのも、この会でのことでした。亀田小帖、この方は明治俳壇の研究者ですが、この方の娘さんがお話にきてくださった。そのとき、粗末な夏布の前垂れを持つてこられました。これは父上である小帖が正岡子規さん宅から持ち帰った子規の妹さん、病氣の子規の看病をしておられたあの律さんですね。その律さんが日常使っておられたものだったんです。正岡さんの形見にしていますとおっしゃっていましたが、その前垂れが、これ以上始末のしようがないくらいに、古い布をやりくりして作ってありまして、もとは着物だったことがわかるツギのあて方なんです。紐は幅一センチくらいの細い布をチクチクと縫ったものでした。それを自分の胸に回してみたとき、律さんの体格、正岡家の家政、それらが身近に伝わってきました、それまで『仰臥漫録』その他で読み知っていた律さん、または正岡家の台所、それらを凌駕するモノの凄みのようなものを感じました。

京阪神の俳人たちが育んだ明治以降の関西俳壇には、固有の歴史があります。淀川俳句会とか、京阪満月会とかの明治期の句会、これは松瀬青々や青木月斗という大阪の商人たちでつくっていた句会ですが、大正晩期から昭和初期になってこれに帝大を出て住友という大きな企業に勤務していた日野草城、山口誓子のような都会派のサラリーマン

が加わってきました。その方々が寄って近代俳句の礎を築いたという歴史があります。よく知られた話ですが、草城が、京都の第三高等学校時代に張り出した俳句部の部員募集を見て山口誓子がこれに参加したんですね。やがて京大俳句会を生み、対抗するかたちで東大俳句会ができて、水原秋櫻子をはじめ、富安風生、山口青邨、高野素十らが育っていったんです。

そんなことを追体験しておりますと、前に進む時間、未来を考える時間が大事であるのと同じように、後へ遡る時間も大事だと思われてくるんです。

大阪にゆかりの俳人、これを個別に見てまいりますと、まだまだ検証しなくてはならない人がたくさんおられます。その中の一人が、先ほど、吉本さんのお話にも出ました林田紀音夫です。「関西の俳人たち」の一人としてこの方のことを思い出してみたく思います。

本日、ここに掲げていただきました「関西の」と申しますのは、「大阪俳句史研究会」の「大阪」と同じく、関西に住んでいるとか、または関西を活動拠点として、という意味合いで、エリアに自足しているという意味ではないんです。先に申しましたように、どこかに中央があつて関西という地方がある、という概念は払拭していただきたいんです。ですから、林田紀音夫という俳人そのものが中央です。俳人林田紀音夫は、それにふさわしい俳人でした。

昨年の八月に、没後八年を経てその林田さんの俳句を一集にまとめた『林田紀音夫全句集』が出ました。これは当会の先輩であります福田基さんのご尽力によるものですが、林田紀音夫という俳人は、死後という未来を生きている人だということをあらためて実感いたしました。

この全句集が出ましたとき、多くの人が虚をつかれたような感じを抱いたのではないかと思います。林田さんは、かの地震の前あたりまでは、このような集まりにもよく出ておられました。白晳の瘦身で、静かな方でしたね。

私が、現代俳句協会とか、今日のような集まりを有意義だと思えますことの一つに、私自身がそうでしたように、こういう会に出てきたからこそ、多くの先輩たちにお目にかかることができたということです。もしこういう会がなかったら、私は、高屋窓秋とか加藤楸邨とか、高柳重信とか、三橋敏雄とかいう方とお目にかかる機はなかったろうと思います。林田さんと最初にお目にかかったのも、もう何年も前のこの協会での集まりでした。それに、あれは昭和四十何年でしたか。私の友人が句集を出しまして、それのお祝いの会を豊中の公民館でやりました。当時は、まだ句集刊行が稀でしたし、立派な場所で祝賀会をするというようないない時代でした。その席に林田さんと堀葦男さんにおいでいただきました。そのとき、べつにお願いもしないのに、林田さんが、今から歌をうたいますとおっしゃっ

てお歌いになったのですが、これが何の歌かわからない。お経のような、なんともへんな歌でした。ところがよく歌詞を聞いてみますと、どうやら当時ブームを巻き起こしていた宝塚歌劇の「ベルサイユの薔薇」の主題歌であることがわかりまして。その夜、桂信子から、あれは何だったのかと電話がかかってきましたね。

林田紀音夫には、生前に刊行された単行句集が『風触』と『幻燈』という二冊しかありませんでした。代表句として取り上げられる句、よく知られた句の大方はこの二冊に入っておりますので、この二冊があればいいように思われますが、私の先生の桂信子や、同じく日野草城門であった松阪にお住まいの五十嵐研三さんが、草城先生がいかに林田さんを高く評価しておられたかを語っておられたこともあり、ぜひ全句集がほしいと切望しておりました。

林田紀音夫のよく知られている句に
鉛筆の遺書ならば消え易からむ
があります。他にも

隅占めてうどんの箸を割り損ず

黄の青の赤の雨傘誰から死ぬ

洗った手から軍艦の錆よみがえる

煙突にのぞかれて日々死にきれず

いつか星空屈葬の他は許されず

など、人口に膾炙した句がたくさんあります。そんな句の

多くを、最初に見出したのは日野草城です。桂信子や五十嵐さんがやきもちを焼くほどに、草城は林田紀音夫を評価しておられます。このことは、話として幾度も聞いてまいりましたが、今回、作品の採集のお手伝いをするに際し、室生幸太郎さんから戦後の「青玄」とか、日野草城が編纂した青玄の合同句集『碧落』を拝借して、たとえば〈鉛筆の遺書ならば〉や〈黄の青の赤の雨傘〉などを最初に称賛したのが日野草城であったことを自分の目で確認をしまして、あらためて草城の炯眼に刮目しました。

林田さんはもとと下村槐太門でした。戦後、そこでガリ版を切るといってお仕事をしておられたのですが、そこを襲ったのが肺結核ですわ。そんな陰鬱な日の窓から見える日野草城の世界、これは輝いて見えたと思います。

収集された一万句を一気に読むということなど、とても不可能ですが、一頁一頁をよんでおきますと、一万句が一つの風景に収斂されて見えてくるんです。草城も、林田君の句は、概して憂鬱、沈痛であると評しておられましたが、夜明けがきて、太陽が燦々と照る真昼がくる、というような句はまずない。

雨が降ります。傘をさします。日暮れがきます。そして夜闇がきます。やがて死世界に入ってゆきます。このテーマを多角度から句にしておられる。とにかく傘の内が一つわが空間、わが世界になるんですね。これは雨好きの私

も、傘をさしたときに感じるところなんです。傘の下というのは個室なんです。私にとつてはそこは安息空間なんです。ところが林田さんはそうではなかった。

そんな思いのまま、今回、一万句を見まして、私の前に迫ってきた林田紀音夫像は、全句集を読む前の林田紀音夫とは、少し違っておりましたね。

林田さんが、当時暮らしておられたのは大阪の大正区の尻無河のほとりです。尻無河といえば、榎本冬一郎の句集『尻無河畔』を思い出します。これについて、榎本さんが「大正区は俳句の宝庫だ」とおっしゃっている。あの榎本冬一郎をしてかく言わしめたということは、そこが美しい絵のような風景の地ではなく、マルマルの人間が息づいているということの喩だろうと思います。それにつけて私が思いましたことは、林田紀音夫という俳人の句とは、テーマも言葉も悲観主義の態をなし、読者にマイナーな印象しか与えないように書かれておりますが、あれは林田さんの「生きたい。生きるぞ。生きてやる」という意思の表明だったのではないか。林田さんは、生きたいと願望するときに「死」を書くんです。暗闇を書くことで「明るさ」を求め、生きるリアリズムというのでしょうか。大正区の尻無河畔という場が、生きるしかないという林田さんのリアリズムを諸に引き受けてくれる場だったのだと思われてくるのです。河が濁っているとか、人々が裸で暮らしているとか、

そんな可視の内に収まるものではない、生きるという強さを肯定してくれる地。林田さんを触発したのはそんな等身大のリアリズムだったのでしょうか。そう思いましたね。

これは尻無河をそのまま書くというのではなく、それをどう書くかということです。それが作家の個別認識ですから、芭蕉を芭蕉として尻無河を書き、蕪村は蕪村として、虚子は虚子として、榎本さんは榎本さんとして書く。同じように、林田さんは林田さんとして書いたということです。

林田紀音夫という一見弱々しげな面持ちの俳人は、本当は弱くなんぞない、強い作家だったのだということです。林田さんは、けっしてワハハハと大笑いするような人ではなかったけれど、本当は弱々しかつたり、生きるリアリズムから逃れるような、薄命の美学を盾に拗ねるような俳句の作り手であつたら、人々はとづくに林田紀音夫の句など忘れてしまつていたでしょうよ。弱さだけを個性とする俳人であつたなら、林田さんの肉体が消えたとき、その俳句もともに消えてしまつていたらどうと思います。

林田紀音夫は、言われているようなペシミストではなかった、うどん屋の隅で箸を割つてというような暗い俳人ではなかった。むしろ十分にたくましかったということです。林田紀音夫は、文学論だけでは語れない、そんなことを思いましたね。

これは、「関西の俳人たち」に共通するところかもしれ

ません。生活者としての強さ、ここに儂が存在して居るぞということ、きちんと認識している強さでもいえないのか。だって永田耕衣の強さがそうでしょう。「われ」がここに居るぞ、という思想を根としていますね。橋間石しかり、鈴木六林男しかりです。「われ」がここに居る、という主観を、洗練された技量で表現しておられます。

これから俳句をやつていかれるお若い方は、実作の傍らに、少しかつていた俳人たちに関することを勉強してゆかれるといいと思いますね。それも、ねじり鉢巻きで勉強するというのはなく、たとえば編年式に俳句史を踏まえながら読んでゆく、というのでもいい。そんなことで見えてくる新風景もあります。ただただ、俳句は楽しい、俳句は面白い、そんな惹句だけに煽てられてやつておりますと、賞味期限がきたら終りみたいな俳人になりますよ。

自己更新のために、前ばかりに走るのではなく、ときには時計の針を逆にまわして「関西の俳人たち」を端緒に、その足跡を振り返つてみるのもいいのではありませんか。いま、青年部の方々が、着実に「関西の俳人たち」の句を読んでおられるようです。期待いたしたく思います。

本日は、準備不足で申し訳ありませんでした。ありがとうございました。(拍手)

(記録・尾崎 青磁)

今年度の課題



関西現代俳句協会

会長 豊田 都峰

秋たけなわの
昨今ですが、会
員の皆様方には
お元気で句会や
吟行会でさぞお
忙しいことと存
じます。私がお

長に就任しましてより、足掛け二年あまり、大過なく現在を迎えることが出来ましたのは、会員の皆様方の一方ならぬご協力の賜物と、厚く御礼申しあげます。
さて、昨年の秋京都で開催いたしました「第四十三回現代俳句全国大会」は、皆様方にお手伝い頂きましたお蔭で、予想をはるかに超える投句数など盛況裡に終了いたしました。

また、二年前から協会の春の行事として定着してまいりました「各府県持ち回り吟行大会」も、今年度は「春の神戸吟行大会」と名付け、春の盛りの四月二十二日、神戸王子動物園前の「原田の森ギャラリー」を会場に開催しました。この日も関西一円から二百三十五人もの参加者があつて、大盛況となりました。

また、今年六月二十四日の総会にお

いて宇多喜代子現代俳句協会会長に「関西の俳人たち」と題してご講演頂きました。その内容につきまして、本号の巻頭記録をご覧下さい。

さて、私がお長に就任してよりただ一点心を痛めていることがございます。それは会員の減少ということがございます。これは現代俳句協会だけの問題ではなく、他の俳句関係の団体においても同じと聞いておりますが、ご他聞に漏れず当会も、もともと老齢の会員が多かつたところへ、死亡、病氣退会等が続き、五年前には九千三百人を数えた全会員も、今や八千人を切るという有様です。

関西も五年前には千三百人在籍したものが、今や百八十人も減っております。もとより会員の数は多ければいいというものではありませんが、会を組織として運営する以上は、やはり適切な人数は必要です。現代俳句協会もこの問題には力を入れておりますが、私どもの関西現代俳句協会としても、一緒になつて会員の増強に力を尽くさなければなりません。そこで、これからの当分の間を「新会員入会促進のための期間」として、主宰・代表の皆さんはじ

め、会員の方々もお友達などご推薦くださいますよう御願いたします。俳句を通じての友達の輪を広げることばわれわれの喜びです。これからも皆さんと共に、俳句を楽しむ場としての協会を守り、育てたいと考えております。

企画部短信

1. 「07年忘年会&句集祭」

07年12月2日(火) 開催

今年もあつという間に過ぎ去ろうとしています。恒例の「忘年会&句集祭」会場は昨年と同様、中之島の「大阪国際会議場」です。多数のご参加をお待ちしています。

2007年に句集等を上梓された方は至急に事務局宛ご連絡ください。

2. 「08年度 春の吟行大会企画」

08年4月6日(日) 決定

過去4回の吟行大会(南琵琶湖クルーズ、和歌山城、京都・八坂神社界限、神戸・王子公園界限)の経験を活かしながら、次年度の吟行大会を検討中。

吟行地は各県持ち回りですが、来年は奈良県です。四月六日(日)、会場は奈良公園の一角、県庁に隣接する奈良県文化会館に決まりました。ご期待ください。皆さまのご意見をお待ちします。

(増田耿子)

関西現代俳句協会事業報告

平成18年7月～19年6月

会長 豊田 都 峰

平成十八年七月から十九年六月にかけての、この一年間は当関西現代俳句協会にとつて極めて困難かつ意義ある活動の歳であつたといえよう。それは、六年に一度巡つて来る現代俳句協会最大のイベント、「現代俳句全国大会」の運営である。

本大会は四十五年前の昭和三十九年一月東京にてスタートしてから、昭和四十一年の第三回目を大阪で始めて開催。以後六年ごとに間に東京を挟んで北九州地区、名古屋地区、関西地区が回り持ちしている。しかし今年は大大会の運営事務を受け持つ事務局が、まったくの未経験者の集まりであり、唯一の経験者である豊田会長の指導と、「京鹿子」のメンバーの献身的な努力で、会場を京都においてのこの大会を乗り切ることが出来た。

もとより大会の運営は、裏方サイドばかりでなく、会員の投句、諸先生方

による選句が無くては成り立たない。この点も宇多喜代子現代俳句協会々長始め、関西内部の顧問、主宰、代表等の先生方のご協力が何よりの力になった。以上、前置としては全国大会の感想を述べたが、別記の諸行事も会員の皆さんの協力があつて初めて成立しているといつても過言ではない。改めて御礼申し上げるものである。

◆現代俳句全国大会の運営

「第四十三回現代俳句全国大会」は、去る平成十八年十月二十一日、京都の京都国際ホテルで開催した。募集句数の本部示達は一一、〇〇〇句であつた。「京鹿子」のメンバーと事務局員の緊密な連携プレーで作業を開始した。その結果、七月三十一日の最終集計を迎えて、応募句数はなんと一五、七四〇句。当初目標を上回ること四、七四〇句という大方の予想をはるかに超えた

結果で、関係者を驚かせた。次にこの句を関西の予選選者二十人、一般選者百二十四人および三十人の特別選者の方々に送り選句していただいた。この間、約二ヶ月、十月はじめに漸く現代俳句全国大会賞二句（うち一句応募規定違反のため取消）、毎日新聞社賞一句その他が決定した。

現代俳句全国大会賞

踊りながら次第に妻でなくなりぬ

（茨城県） 古家 博

毎日新聞社賞

水打つて何もなかったことにする

（あきる野市） 木下 蘇陽

ほかに特別選者特選句二十七句、秀逸賞十四句、佳作入賞四十一句を決定したが、この入選作品の中でも、応募規定違反作がいくつか出たのは残念であつた。

さて、十月二十一日の大会当日は好天に恵まれる中、会場の京都国際ホテルに宇多会長以下の協会幹部の皆さんが続々集合された。表彰の後の講演は俳人でありしかも京都大学総長である尾池和夫先生の『地震を詠む』と題するお話である。先生は日本の地震学の泰斗であるだけに、地震と俳句と絡めてのユニークなお話は三百人の聴衆を

沸かせた。先生にはこの後の懇親会にまでご出席頂き、協会の皆さんとも交流を深められたのは有り難いことであつた。

最後にこの度の大会運営に協力頂いた全国の応募者の方々はじめ選者各位、関係者の皆さんすべてに厚くお礼申し上げます。

◆「〇六年度忘年会&第三十二回句集祭」

○六年度の「忘年・句集祭（略称）」は、十二月五日（火）午後二時より大阪国際会議場に於いて開催された。それに先立つ理事会において、豊田都峰会長より十月二十一日京都で行なわれた「第四十三回現代俳句全国大会」の報告が行なわれ、続いて〇七年四月開催予定の「春の神戸吟行大会」の進行状況が報告された。

その後恒例の「忘年・句集祭」に入り、昨年の句集祭以降発行された会員の句集・エッセイ・評論等作品等三十三冊の展示と、墨書、コンピュータによる発表および出展者よりの挨拶などが約二時間にわたつて続いた。

その後、席を移しての忘年会が始まり、和田悟朗顧問による乾杯の音頭とともに和氣藹々たる懇親会となり時を忘れるほどであった。

◆春の神戸吟行大会

昨年の京都に続く今年の各府県持ち回りの吟行大会は、春たけなわの四月二十二日（日）、神戸市内の王子動物園の前に位置する「原田の森ギャラリー」にて行なわれた。時折は雨もよいの会場であつたが、なんと昨年より勝る二百三十五人の参加があり、我々関係者を驚かせた。今年は選者もいつもより多く和田悟朗、立岩利夫、花谷和子、豊田都峰先生ら十人の先生方のご出席を頂き、特選二十句、入選八十句を選んで、夕刻散会した。なお特選賞品には昨年に続き協会発行の『現代俳句歳時記』を贈つた。なお、来年は奈良である。

◆総会

今年の「総会」は六月二十四日（日）午後一時より、大阪国際会議場において行なわれた。先ず理事会を開催、それに続く総会にて総会成立宣言の後、昨年来の会員物故者に黙祷を捧げ、議事に入った。議事は昨年度の会計報告と、十九年度の活動計画、同予算案の発表。次いで規約の一部改正と顧問・役員・理事の委嘱・任命が豊田都峰会長より行なわれ、いずれも出席者の了承を得た。

続く「講演会」は現代俳句協会会長・宇多喜代子先生による「関西の俳人たち」と題しての興味深いお話があつた（詳しい内容は本号の巻頭記録をご覧ください）。この後五時から席を変えて和田悟朗顧問発声の乾杯の後、懇親会に移つたが、暮れなずむ生駒・金剛山地や大阪市内の街の灯も着に約二時間の楽しい機会を持ち散会した。

謹 悼

村 本 佐 紀 夫 先 生

（白 薔 橋）

平成十九年七月十二日 逝去

森 田 透 石 先 生

（ 櫻 ）

平成十九年十月 一 日 逝去

謹んでお悔やみ申し上げます。

平成十九年十月

関西現代俳句協会

葉桜の雨につつまれて 『神戸吟行大会』挙行

二〇〇七年度、関西現代俳句協会「春の吟行大会」は、四月二十二日(日)、神戸において開催された。

午前十時頃には、すでに雨が降り始めた神戸の街は、薄みどりの葉桜が濡れて春を惜しむ風情に包まれていた。

今大会は、付近に動物園が控えていたためか、動物に困んだ作品が多く、神戸にふさわしい洒落た感覚の力作が揃った。特筆すべきは、大会

に作家の眉村卓先生をお招きし「俳句と小説」なるタイトルのもと、一時間にとわたる、楽しい講演によって一層の盛り上がりを見せたことである。



会場の選者の諸先生方

日 時 記

二〇〇七年四月二十二日(日)
吟 行
神戸市内自由吟行

会場 灘区原田通「原田の森 ギャラリー」

選 者 和田悟朗、立岩利夫、花谷和子、豊田都峰、

吉本伊智朗、豊長みのる、赤尾恵以、谷下一玄、小泉八重子、三宅睦子の諸先生

参加者数 二三五名

賞 品 選者特選賞 民芸品「有馬筆」

佳 作 賞 図書券

会場確保から、準備まで、ご協力いただいた地元兵庫県
の結社主宰ならびに会員諸氏をはじめ、参加者動員にご尽力
いただいた京都、大阪の各結社の方々に對して、ここに
厚く御礼申し上げます。

あいにくの雨となった吟行大会。反省材料は来年への糧
として稔らせたいと考えている。

来年度は奈良県の順番である。すでに四月六日(日)に
決定。会場の奈良県文化会館との交渉に入っている。お手
伝いいただく方々には苦勞すると思われるので、もし「やつ
てやろう」という人があれば事務局までお申し越しいただ
ければ幸いです。

(増田 耿子)

◇和田 悟朗 先生 選

特 選

ゆく春の兜太兜子の昭和かな

神戸市 西村 逸朗

堪へてある空の重さへつばくらめ

彦根市 勝又千恵子

入 選

象の目のどこ見るもなく春深し

大阪市 降旗 幸子

右脳より花溢れだす動物園
犀の目に時間の停止沈丁花
行く春の水平線をぬらしけり
咆哮は水の中より花筵
獸等の人を觀てゐる蝶の昼
四不像は逝き獸園の春闌ける
花の雨何かつかまん象の鼻

宇治市 尾崎 青磁
京都市 花谷 清
守口市 谷口 洋
神戸市 井内 繁子
吹田市 大角 泰子
神戸市 細原 順子
豊中市 山近由起子

◆立岩 利夫 先生 選

特 選

ひとひらの落花見送る生田川
遍照の嶺の六甲ほととぎす

神戸市 林 仁子
尼崎市 河井 千瓢

入 選

空港に続く坂道鳥雲に
六甲は街の屏風や蔦若葉
デパートに海側山側夏に入る
若葉雨柱時計が狂いだす
楠若葉おもちゃの汽車が休憩す
風見鶏春の海山飽きもせず
犀の目に時間の停止沈丁花
春時雨煉瓦教会窓閉ざし

堺市 川嶋 義治
吹田市 上村 勝子
西宮市 佐野 玲子
神戸市 渡辺 景子
大阪市 降籬 幸子
神戸市 松本 春虹
京都市 花谷 清
芦屋市 舟越 絵筆

◆花谷 和子 先生 選

特 選

園丁はボランティアらし芽木の風

神戸市 横田 静子

咆哮は水の中より花筵

入 選

象の目のどこ見るもなく春深し
デパートに海側山側夏に入る
縞馬の縞のもつれや蠶ぐもり
遠足の子を見てをりしゴリラかな
愛の羽根ひろげる孔雀花の雨
蝶の来て蝶連れ去れり異人館
花の雨長寿の国に象生きる
河馬潜る花びらそこに渦巻けり

神戸市 井内 繁子
大阪市 降籬 幸子
西宮市 佐野 玲子
京都市 山田 和
京都市 山田 和
川西市 辻本 孝子
草津市 高橋 千美
豊中市 口村 洋子
豊中市 大島 時子

◆豊田 都峰 先生 選

特 選

春陰や眼にまつさらなフラミンゴ
金緑の孔雀は舞ひて余花なほも
春愁のデカルトカントマントヒヒ
蝶追へば丘の煉瓦の異人館
風見鶏どこを向いても花は葉に
縞馬の縞のもつれや蠶ぐもり
桜蕊降るキリンの遠目差し
海見える丘の十字架リラの風
霊長目いっぴき坐り花終る
晩年へ靴を買ひ足す遅日かな

宝塚市 三木 基史
河内長野市 葉山かをり
神戸市 島田 雄作
京都市 村田富美子
豊中市 佐野 玲子
京都市 山田 和
明石市 藤本 睦子
川西市 近藤詩寿代
三木市 吉本伊智朗
大津市 志村 宣子

◇吉本伊智朗 先生選

特選

檻の土こまかく篩ふ端午かな
春愁のわたしに迫る犀の角

神戸市 井内 繁子
神戸市 中村 遙

入選

残花飛花世を吹き上ぐる象の鼻
桜蕊掃くや猛禽眼閉じ
夏鷹の声十字架をはるかにす
ぼろぼろの駝鳥の餌箱葱盛られ
黒豹は眠り芭蕉は玉を解く
キリンの目どこまで届く八重桜
咆哮は水の中より花筵
犀の背の泥をつつきし雀の子

吹田市 中井不二男
神戸市 小倉 柊
神戸市 多田なりひさ
吹田市 中井不二男
加古川市 高見 道代
川西市 寺門 良子
神戸市 井内 繁子
加東市 浅田須美子

◇豊長みのる 先生選

特選

永き日や河馬が顔出す水面テ
永き日や羽ひろげたる白孔雀

豊中市 平田 繭子
豊中市 小谷 紫乃

入選

十字架を彼方に雨の青鷹もろがへり
花は葉に孔雀大きく舞ひにけり
花は葉に雨まじる風おもく吹き
葉ざくちや白き孔雀は舞ひはじめ
顔見せぬ河馬に人寄る暮の春
余花曇り羽を閉じたる孔雀かな

神戸市 多田なりひさ
豊中市 尾崎八重子
大阪市 夕風しのぶ
河内長野市 葉山かをり
京都市 井尻 妙子
豊中市 汀 菜美

うららかや草食む象の鼻のびて
辛夷咲く丘のあなたに海光り

香芝市 中谷 清
舞鶴市 林 日圓

◇赤尾 恵以 先生選

特選

地震跡を知るや知らずや番蝶
世を逆に見る蝙蝠の存念は

豊中市 須田 京
豊中市 宮田 千優

入選

百の眼が過ぎるパンダの日永かな
うららかや湯気に売らるる異国菓子
三鬼忌の曾ての住まい覗く町
楠若葉おもちやの汽車が休憩す
風見鶏どこを向いても花は葉に
ゆく春の兜太兜子の昭和かな
潜りたる河馬の孤独や花の蕊
河馬の口あく迄待とう新樹光

吹田市 柏原 才子
吹田市 柏原 才子
神戸市 桑木 利一
大阪市 降籬 幸子
西宮市 佐野 玲子
神戸市 西村 逸朗
神戸市 山口加代子
豊中市 和田かなえ

◇谷下 一玄 先生選

特選

霊長目いっぴき坐り花終る
獸等の人を見てゐる蝶の昼

三木市 吉本伊智朗
吹田市 大角 泰子

入選

黒豹は眠り芭蕉は玉を解く
春風に芸を見せぬ手なが猿
風見鶏どこを向いても花は葉に

加古川市 高見 道代
堺市 西上 邦子
西宮市 佐野 玲子

海側も山側も春ループバス

新樹光傾斜の街の案内図

筆跡は美美子のもよ樟若葉

青かえで犀は巨体をもて余す

河馬の口あく迄待とう新樹光

神戸市 野中 珠代

城陽市 松本 鷹根

枚方市 森 武子

神戸市 横山美代子

豊中市 和田かなえ

◇小泉八重子先生選

特選

象に見え人らに見えていぬ暮春

花筏割りジユラ紀の河馬浮上

京都市 花谷 清

神戸市 田口美喜江

入選

ぼろぼろの駝鳥の餌箱葱盛られ

みどり立つ象の時間と同化して

日本史も抱き惜春異人館

犀の背の泥をつつきし雀の子

リスざるの誰が親やら山吹の花

世を逆に見る蝙蝠の存念は

パンダ館出でずもがなの蜥蜴出づ

若葉喰み鉄柵もなめキリンの舌

吹田市 中井不二男

神戸市 赤尾 恵以

西宮市 志々見久美子

加東市 浅田須美子

神戸市 中下 斌子

豊中市 宮田 千優

西宮市 黒田 卓示

豊中市 石川日出子

◇三宅 睦子先生選

特選

クローバーの背伸びして見る豪華船

期待して来たる街並若葉風

豊中市 林 のぶえ

枚方市 森 武子

入選

文豪の推敲のあと春深し

春禽や南北つなぐ赤い靴

みじろがぬパンダに降りし桜蕊

春愁の片脚あげるフラミンゴ

猛獣の園に真近く楠若葉

みじろがぬ河馬の双眸緑萌ゆ

残花かな帽子の似合ふ文学路

春陰や眼にまつさらなフラミンゴ

枚方市 篠原 苑子

豊岡市 熊田みちの

加東市 出井なつ子

河合町 増田 耿子

生駒市 和田 悟朗

宝塚市 大津 茂子

豊岡市 坂口 享子

宝塚市 三木 基史

選者の先生方



左から 豊田、豊長、谷下、吉本、立岩の諸先生



左から 三宅、小泉、花谷、赤尾、和田の諸先生

青年部この一年

青年部部长

上 森 敦 代

いつも青年部活動にご理解、ご協力いただきありがとうございます。

昨年十一月に第一回青年部勉強会で西東三鬼を取り上げて以来、今年一月の第二回勉強会では赤尾兜子、五月の第三回勉強会では林田紀音夫について、と回を重ねてまいりました。勉強会では、青年部員の基調報告に続き、取り上げた俳人と生前ゆかりのあった人たちをゲストに招き、句の生まれた時代背景などに想いを馳せ、人物や俳句の理解を深めていこうと試みました。ゲストのお話を伺ううちに、思いもしなかつた俳人の一面にであつたり、想像することの難しい時代と言う壁にぶつかつたりした時間は、貴重なひとときでした。

どの勉強会にも、定員いっぱいの人たちにご参集いただき盛会でした。参加メンバーの研究対象の俳人に対する関わりは、さまざまで、師系として研究を重ねてきた人もいれば、これを機会に初めて俳人の句を読んでみた人、面白そうだから勉強会を覗いてみよう

と思つた人たちなど……。この多様さが、勉強会の魅力でもあり、今後の課題でもあるのではないかと思つています。今後、参加した人たちが、この勉強会で得た何かを、自分との俳句の関わりの糧にさせていただけることを願っています。

今後、関西ゆかりの俳人を取り上げ、よりよい勉強会のために試行錯誤を重ねていきたいと考えています。ご意見ご希望等をお寄せいただければ幸いです。

事務局便り

十二月の「忘年・句集祭(略称)」で、今年の事業も終ろうとしています。会報の本文で紹介できなかったことなど、まとめてお知らせいたします。

①六月二十四日大阪国際会議場にて開催された〇七年度総会は九十人近くの出席者があり、主に昨年度の会計報告、今年度の予算案などご審議頂き、いずれも事務局提案の形で可決されました。詳しい数字は別表の会計報告等をご覧ください。

②昨年の全国大会や、今後の事業展開当に鑑み、新たに広報部門の新設が決まり、それに伴う「協会規約」の

一部変更が審議され、規約に広報部長(一名)の項目を設け、理事会・総会共にご承認頂きました。

③それに伴い会長から事務局の担当役員が移動が提案され、次のように承認され、即日発効しました。

広報部長 中井不二男(異動)
経理部長 村田富美子(新任)

その他の役員の変更はありません。

④既報、和田悟朗顧問の「現代俳句大賞」ご受賞に伴う祝賀会は、先生のご意向もあつて、協会主催の会とはせず、先生に関係の深い有志による会となり、去る七月十六日、大阪梅田のラマダホテル大阪において開催されました。外部の参加者も含めて、七十七名による心のこもつた祝賀会になりました。

なお、発起人は宇多喜代子会長、豊田都峰(関西)会長でした。

⑤今年度「協会顧問」に委嘱させて頂いた方(八十歳以上で、協会に貢献のあつた方)は、

澁谷 道(海程・紫薇)

梶山千鶴子(きりん)

のお二方です。今後とも益々のご活躍とご指導を御願いたします。

(事務局・尾崎)

新会員の一句

今年、現代俳句協会にご入会いただいた方々から、一句づついただきましたので、ご披露いたします。

灯りあるやうにも春の船障子 草樹 足立 礼子
 豊潤に盛られマンゴー夕焼す 俳星会 安藤 菊美
 実りの田風のパンチにふて寝する 海程大阪 上田 和代
 晩学に気負ひなどなし水澄めり 京鹿子 岡本 一路
 降り立てば故郷の匂い稲の花 藍 加藤 章三
 三叉路に思ひを馳せる夜長かな 半夜 川嶋 義治
 真夜の滝銀河に音を響かせて 暁 岸上 紀子
 飛び立ちてこそその翼や青田中 藍 古根村智子
 虚無というほどでもない私の静脈の音 層雲 小山 貴子
 夏の河渡り電車は大阪へ 古志 田中 信爾
 大文字消えたる闇もただならね 草樹・もちの木 田宮 尚樹
 目の玉に力のもどる秋彼岸 藍 徳見 淳子
 風雪の凍鶴はいち尽くすなり 風樹 とよなが夕美
 もどる日も発つ日も風や桐の花 草樹 辻 七重

杭打って花野の記憶繋ぎをく 京鹿子 仲井多美江
 踊子草踊れぬほどにわつと咲く 半夜 西上 邦子
 白鳥の岸へは寄らず湖昏れる 大山崎句会 野上 公子
 橋の灯の海にこぼれて星月夜 藍 幣守 玉江
 昭和の日ポップコーンに長き列 檉 三木 基史
 一つずつ合わせしピース秋灯 宮崎 未来
 秋海棠荷風愛でぬと日記帳 駅 武藤 士侑
 登校の声のそろひし柿若葉 草樹 薬丸けい子
 途切れなきニユーステロップ秋暑し 藍 山城 馨子
 かなかなを私の中に育ておく 龍鼻 吉田紀代美
 背を割りて己を晒す空蟬よ 藍 米岡 隆文

このほかに、新会員の登録を済ませていただいているのは次の方々です。合計30名（〜平成十八年十二月末まで入会の方）

大川 公子、塩見かず子、横田 禮子、宮崎 信、
 山口加代子（敬称略）



平成18年度 会計報告

2007年6月24日

(自・平成18年1月1日～至・平成19年3月31日)

(関西現代俳句協会) (単位：円)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
繰越金(前年度より繰越金)	1,782,140	総会費(会場費・懇親会費・その他)	909,481
本部交付金(一次2,000円×1,034人 二次2,000円×77人)	2,222,000	会議費(諸会議費)	101,449
総会費(懇親会費7,000円×75人)	525,000	吟行会費(会場費・賞品費・その他)	380,877
吟行会費(京都・投句料2,000円×183人)	366,000	句集祭費(会場費・懇親会費・その他)	856,766
句集祭参加費(懇親会費7,000円×57人)	399,000	青年部助成費(会場費・講師代・その他)	127,008
青年部参加費	42,000	印刷費(会報・封筒代・その他)	175,770
雑収入(句集祭御祝金)	10,000	事務費(事務用品)	82,898
剰余金(全国大会・その他)	605,931	通信費(郵送料・電報電話代)	548,743
		交通費	64,810
		役員手当	554,075
		雑費(消耗品代他)	36,750
合計	5,952,071	合計	3,838,627

収入 5,952,071円－支出 3,838,627円＝2,113,444円

残金 2,113,444円は次年度へ繰り越します。

会計 村田 富美子 印

平成19年6月10日

上記、監査の結果すべて正確且つ適正であったことを認めます。

会計監査 小泉 八重子 印 若森 京子 印

平成19年度 予 算

2007年6月24日

(自・平成19年4月1日～至・平成20年3月31日)

(関西現代俳句協会) (単位：円)

収入の部		支出の部	
項目	金額	項目	金額
前年度繰越金	2,113,444	総会費(会場費・懇親会費・その他)	900,000
本部交付金	2,200,000	会議費(諸会議費)	200,000
総会費(懇親会費)	500,000	吟行会費(会場費・賞品費・諸雑費)	500,000
吟行会参加費(神戸・吟行大会投句料)	400,000	句集祭費(会場費・懇親会費・その他)	900,000
句集祭参加費(懇親会費)	400,000	青年部助成金	200,000
青年部参加費	40,000	印刷費(会報・封筒代・その他)	200,000
		事務費(事務用品)	200,000
		通信費(郵送料・電報電話代・その他)	500,000
		交通費	200,000
		役員手当	560,000
		慶弔費	50,000
		雑費(消耗品代)	50,000
		次期繰越金	1,193,444
合計	5,653,444	合計	5,653,444